



西宮市展賞レビュー展

2019

おうちでアミテイ
再編集版 後編

第 69 回西宮市展（令和元年）において各部門の最優秀賞である「西宮市展賞」を受賞した 7 名の作家による展覧会「西宮市展賞レビュー展」のパンフレットからインタビューのページを抜粋。2 回に分けてお届けいたします。（初出：2019 年 11 月 27 日）

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、7 月開催予定だった第 70 回西宮市展について、令和 3 年度に開催延期とさせていただいております。
ご出品やご来場を楽しみにされていた皆様にご場をお借りしお詫び申し上げます。

野口貞夫

作者紹介

1932年生/1957年大阪大学医学部
卒/1962年同大学院修了 医学博士/
元西宮市中央病院院長、現西宮市
医師会診療所所長/医師会写真部に
所属



西宮市展賞受賞作
赤い傘

写真

インタビュー

— 作家活動をされるようになったきっかけを教えてください。

作家ではないんです。カメラは学生時代に旅行の記録や、学会発表などのスライドづくりの為に始めました。

— 医師でおられるんですよね。撮影旅行なども行かれますか？

写真についてはアマチュアですし、仕事もあるので撮影を目的にした旅行などはしていません。

— なるほど。「作家ではない」と仰る傍らで、作品は大変魅力的です。受賞作、幾何学的でまるでデザインのような写真ですね。審査員コメントにもありますが、「目に留まる」作品です。普段はどんな写真を撮影されますか？

ふと目に留まった情景や、自分の感性に響く対象を撮影しています。一期一会という言葉がありますが、今の瞬間は二度とない、と思うので、カメラの設定を考えて撮影するよりは、スナップ写真が主です。しかし、今回の写真は赤い傘をさした人物をいれ、その向きや場所を種々変えて撮影したものでスナップ写真ではありません。

— 受賞作はどのようなカメラを使われたのですか？

PanasonicのLUMIX-GMです。+1についても同じカメラ

を使用しています。

— 普段からLUMIXが使われているんですか？

そうですね。メモ帳の感覚でCASIOのEXILIMもよく使います。性能も良く、薄くてポケットにも入りますので。

OLYMPUSのOMD E-M1 Mark IIに12・100mmの標準ズームレンズをつけたものも持っています。重たいので遠くへ行くときは持っていないです。

— カメラの撮影機能には頓着されないのですか(笑) 野口さんは市展へのご出品はまだ二度目とお伺いしています。

はい。昨年初めて出品したときには、入選できればよいがと思っていたのが佳作を頂き、今年は市展賞と一足飛びに立派な賞を頂き、驚いています。

— 最後に今後の目標を教えてください。

伝統ある西宮市展で、私がこのような賞を頂けたことで、一般の写真愛好家の人たちが市展に応募してみようという意欲が沸いてくるのではないのでしょうか。私自身はこれまでと変わらず撮影を続けていきますが、いただいた賞を汚さないように頑張りたいと思っています。

審査員コメント

ユニークでどれよりも目に留まる秀作である。シンメトリーの白い階段に赤い傘がよく映えている。

本人コメント

幾何学模様に見える階段を見つめ、白い壁に赤い傘をポイントにすれば面白いのではと考え、娘に頼んで傘をさしてもらいました。



+1

昼寝の邪魔をする

奴はだれだ！

本人コメント

ペットブームで、本屋に行くときとペットの写真や随筆などで一角が占められています。人間、大きく分けると犬派と猫派に分かれます。犬派と猫派にわかれるかと思いますが私は猫派です。こちらは芦原温泉に行ったとき、散歩の途上でふと目についた情景です。

写真

貴志在介

西宮市展賞受賞作 跣の塔



作者紹介

<http://www.dohjidai.com/>

[同時代ギャラリー 作家ページ有]

<http://jarfo.jp>

[京都藝際交流協会JARFO 作家ページ有]

わたしたちが築き上げてきたもの。その足元には家族や友人、それを何重にも介した人たちがいる。しかし、わたしたちはそれらが崩れ去る姿を目の当たりにしてきた。わたしたちはどうすればいいのだろうか。足元を見ると今日も跣でいる。

本人コメント

次世代の彫塑・立体としての価値を提示する作品。シャープな直線と足の曲線の対比が素晴らしく、伸びやかな空間を作っている。伝えたいメッセージも明確であり、高く評価された。

審査員コメント

インタビュー

—文化振興財団情報誌「アミテイトイム」で以前お話を伺いましたので、実は2回目のインタビューになります。
—そうですね。
—まず、作家活動を始められたきっかけを教えてください。
—はい。幼少期からアートが身近な存在だったのがきっかけだと思います。
—ご家族に芸術家が多いんですよね。
—父が彫刻家で母が画家なんです。兄、親戚、従妹も芸大卒ですね。



飯（ハン）はペン
よりも強し

本人コメント

「トウキディダスの罫」という言葉はご存じでしょうか。これは、ペロポネソス戦争に関する「歴史」という本を著した古代アテナイの歴史家、トウキディダスに因む言葉です。これは、約2500年ほど前に、スパルタとアテナイ間で起きた戦争です。つまり、この言葉は、それまで覇権国に対して挑戦する新興国が出現したときに、お互いにそれを望んでいないにも関わらず、戦争が起きてしまう現象を指しています。そして、この作品では、一輪車に大きさが異なる車輪を二つ付けました。それは今のこの世の中、大きな国が争い、米（食）を取り合っているというコンセプトで制作しました。

—完全に芸術家一家ですよ。受賞作、あれはどうやって作られてるんですか？
—合板と樹脂で作成しました。

—貴志さんにとって、素材は制作で大きな要素ですか？
—実は近年、素材へのこだわりはかなり低いと思います。

—そうなんですか？
—素材に固執すると、どうしても視覚的な部分へ観る方の注意がいつまうんです。それよりも自分が制作する作品については社会的背景を投影することが軸であると考えています。ほとんど十割と言っても良いかもしれませんね。

—受賞作、ワールドトレードセンターのツインタワーがモチーフですね。
—はい。911テロの時、当時まだ大学生でしたが、強い衝撃を受けました。私たちが積み上げてきたものは、どれだけ強固に見えても、実際はもろいものなんだと感じました。今作については「しつかり立とうとする・でも裸足でいる」そんな感覚を表現したかったんです。

—審査員コメントにある、メッセージ性の部分ですね。最近の作家活動はいかがですか？
—2月に京都のギャラリーが個展「コメント」からコメント/コメントからコメント」という展覧会を企画してくださいました。現場では友人にも制作作業を手伝ってもらい、DIYに近い感覚で作りました。
—最後に、今後の目標を教えてください。
—そうですね。やはり社会背景と向き合った作品制作を続けていきたいと思っています。

彫塑・立体

中川仁子

西宮市展賞受賞作 きらめく波

審査員コメント

色彩と構図が流れるように調和されており、美しくも力強い。技術的にもしっかりとした力作である。

本人コメント

昨年から横縞の一種の丸縞の魅力にはまっています。主人と行ったケアンズのグリーンアイランドの美しい海ときらめく波を、丸縞で表現しました。織りの奥深さと楽しさを、改めて感じました。

工芸

+1 きらめく陽(たいよう)



本人コメント

引き続き横縞の一種の丸縞です。今回は大好きな沖繩うるま市の勝連城址から見た夏の朝の空を丸縞で表現しました。澄んだ空気に南国の夏の暑さと太陽の美しさを、糸に染め分けた作品です。

インタビュー

— 作家活動をされるようになったきっかけを教えてください。
以前より機織りに興味がありましたが、家庭も仕事も一段落した2007年、卓上機との出会いから、個人で楽しみ始めたのがきっかけです。

— なるほど、教室等には通われたのですか？
5年程前に伊丹市工芸センターで手織機の講座を受講し、織りの基本から学ばせてもらいました。

— 中川さんの作品は迫力と繊細さが同居しているといった印象です。制作ではどのような点を心がけておられますか？
基本を学習したあと、諸先輩の作品をたくさん見る機会を持つことにとめました。それと、デッサンから図案化して自分が表現したいものを織り出すように心がけました。

— ありがとうございます。最後

作者紹介

1950年兵庫県伊丹市生
2016年西宮市展初出品・佳作
2017年西宮市展・入選
2018年西宮市展・西宮市議会
議長賞